

# 谷川俊太郎研究

光 勢 友 子

## 目 次

はじめに

### 第一章 谷川俊太郎の半生

#### 第一節 谷川俊太郎の生い立ち

#### 第二節 谷川俊太郎と詩

### 第二章 谷川俊太郎の作品

「生きる」ことに対する感情

#### 第一節 作品「ネロ」

#### 第二節 作品「生きる」

#### 第三節 作品「犬と主人」

### 第三章 谷川俊太郎のコスモロジー

おわりに

## はじめに

私が彼の作品に初めて出会ったのは、小学校六年生の三学期である。国語の教科書に小学校を卒業するにあたって、心の準備のためにと用意された詩のなかの一編が「生きる」という詩であった。

「生きる」の詩を初めて読んだときに何となく共感を覚え、それから谷川俊太郎という詩人と作品に興味をもつようになった。そして、高校二年生の時に「アリス」という作品についてレポートを書き、彼の生い立ち、作品、人生観などについてさらに深く研究してみたいと思うようになった。この卒業論文では、生きることの素晴らしさについて述べてある「ネロ」と、私が最初に出会って最も感動を覚えた詩「生きる」を中心に研究していきたいと思う。

## 第一章 谷川俊太郎の半生

### 第一節 谷川俊太郎の生い立ち

谷川俊太郎は昭和六年（一九三一年）十二月十五日に、哲学者である父谷川徹三とピアニストである母多喜子の一人息子として、東京信濃町の慶応病院の一室で、帝王切開によりこの世に生まれた。谷川は帝王切開で生まれたことに対して、若い頃はどこか高級なことのように思われ、自慢たらしくそれを口にしていたが、年をとるにつれてその事実が妙にひっかかるようになった。そのことに対して谷川は次のように述べている。

## 第二節 谷川俊太郎と詩

自分にとって生は自らの力と意志でかちとったものではなく、他人の手によって与えられたものであるということを考えると自分は愛想のいいわべと裏腹に自分自身の奥深くに巣食っている傲慢の源に触れるような気がした。(三角宇宙)

谷川はひとりっ子だったこともあったし、父親が仕事第一の人間であったこともあり、母親との絆は異常なくらい強かった。また、谷川を取り巻く環境は、敗戦直後にもピアノレコードがぎっしりあるという経済的・文化的に恵まれたものであり、谷川自身も自らのことを次のように述べている。

ひとりっ子で自分は恵まれた環境のなかで育ったと思うし、その中で育ちつつ、わたしの生への意志はひねこびず、素直に育定的だった。(散文)

たしかに、谷川は当時(敗戦直後)としては、豊かな暮らしをしていた。しかし、谷川自身は、その豊かさを次のように述べている。

その豊かさを不幸とは言えないが、あまり楽しいものではなかった。その理由は、生まれや育ち、環境や時代の諸条件に支配されながら、どんな子供にも子供であるが故の共通の苦しみがああり、それは子供であることの幸せと表裏をなしているのではないか。(暗さと無力)

恵まれた環境の中で青春を送ったためか、貧しさ・反抗・挫折・絶望といった多くの人の青春につきものの暗い側面が谷川の青春には欠けている。不幸を知らない谷川は、他人の不幸に対しても鈍感だったという生い立ちを持っている。

谷川俊太郎が詩のごときものを書き始めたのは昭和二十四年(一九四九年)頃のことである。当時豊多摩中学校(のちの都立豊多摩高校)のクラスメイトであった北川幸比古を通して詩に親しみ始めた。その頃、谷川は自分が詩人になろうなどとは夢にも思っていなかった。谷川はどちらかといえば文学青年ではなかった。それにくらべ北川幸比古は谷川よりはるかに感じやすい文学青年であった。谷川はピンポンにつきあうように、北川幸比古の詩につきあって詩を書いた。当時谷川が最も好んだ詩人は岩佐東一郎であった。谷川は岩佐氏の詩のしゃれっ気と情念の節度とを好み、公然とそれにならっていた。谷川が詩をノートに書き始めたのは、一体どういう心境だったのか、判断としないが、だんだんに詩を書くことの外にすることがなくなってきたのは事実だった。谷川は詩が好きで好きでたまらないといったタイプではない。谷川は受験勉強の退屈まぎれに書いた詩を雑誌等に投稿するようになった。どうしても大学にいくのがいやで、我を通したかわりに、何か自分の仕事のよくなるものを両親に誇示して安心させなければならなかったときに二冊の詩のノートが役に立った。谷川にはそれが一生の詩作の始まりであり、その日からタブ・ガイになることをあきらめざるを得なくなったのである。三好達治が谷川の詩をほめにくたときも谷川はあまりにも子供であった。当時の谷川には詩人になることのおそろしさなどちっとも解っていなかった。谷川は当時の心境を次のように述べている。

今になってみると、僕の詩への入り方は大変いい入り方だった

と思う。僕は何の理想も先入観もなく素直に即物的に詩を知っていた。少なくとも当時は、僕は感傷的でも、観念的でもなかった。僕は自転車に乗るように、ピンポンをするように、詩を書いていた。

(詩を書き始めの頃)

父徹三の依頼で谷川の詩を読んだ三好達治が「文学界」に紹介し、昭和二十五年(一九五〇年)十二月に三好の推薦文とともに「ネロ他五篇」が発表され、詩人として歩み始める。昭和二十七年(一九五二年)に第一詩集『二十億光年の孤独』が東京創元社から刊行される。そして現在までに約二百数十にのぼる著作を刊行している。

## 第二章 谷川俊太郎の作品

「生きる」ことに対する感情

### 第一節 作品「ネロ」

「ネロ」は、昭和二十五年(一九五〇年)十二月に『文学界』に発表され、昭和二十七年(一九五二年)に『二十億光年の孤独』に収載された作品である。この作品は彼の生きることに對する強さがよく表われている。彼の詩的主題をあえて問いつめるとしたら、「生きている」といったことになるのではないのだろうか。「ネロ」は生きているという感情が素直に表わされている作品である。次に「ネロ」という詩そのものについて詳しく分析して行こうと思う。

第一連では、ネロの生きていた証としていまなお思い出すネロの舌、目、昼寝姿を通して、ネロが死んでしまったことを再確認している。

第二連では、自分が今までに経験した夏とネロが経験した夏を比べ、人間が知っている夏は限りがないもので、無限に切り開かれていくものであり、実際に生活したり経験した夏以外に、映画で見たり、本を読んで感じたりした夏からも感動が得られ、夏という季節に生を感じているのではないのだろうか。そして人間は夏という季節を通して、生の大切さを何度実感したのかということを開きかけている。

第三連では、これからやってくる夏は以前自分が経験した夏とは全く違う夏であることをネロに語りかけることにより再認識している。

第四連では、これからやってくる夏を通して、人間が生きているとはどういうことか、生きることはいったい何だろう、何故だろう、どうするべきなのかと自分自身に問いかけながら、人間が生きていることの深さについて述べている。

第五連では、ネロが生きようとしていたこと、本当に一生涯懸命に生きていたことが、ネロを思い出すことよって切実に伝わってくる。

第六連では、これから夏が来るたびに、自分は生きるということについて考え、生きるために苦しみ、戦って生きていくだろう。未来にむかい、生の刻々の新しさを自分自身の肌で感じながら、力一杯生きていくというその決意が伝わってくる。

詩全体には、生きるということの素晴らしさの発見、生きるということは自分が生きたいという欲望を生きようとする決意である。この「ネロ」という詩について谷川は次のように述べている。

ネロはぼくの隣家で飼っていた犬だった。可愛い犬で、垣根こ

しにぼくの家にもしよっちゅう遊びに来ていて、うちでもまるで家族のように愛されていたが、この詩をつくった前年の冬に病気になる、死期を悟ってからは自ら何処か死場所を選びに出てゆき、骸を人にさらさなかつた。ネロが死んでからも半年程たった六月の或る日、ぼくは机にもたれて庭石に照りつける陽差しをみていた。その陽差しはその年の初めて夏の陽差しだった。新しい季節が来るといふ強い感動は、同時にぼくのなかに生る大きな流れに対する感覚を呼びさました。季節の流れ、時の流れ、そして生と死。そしてその時、自分でも気づかぬうちに、ぼくはぼくの愛していたものの死にむかって呼びかけていたのだ。ぼくの中でその時、生は死に呼びかけることで、かえってその輝きを増し、あたかも死に阻まれぬもののように全く感じられた。そしてその感じがあまりに完全なものだったので、ぼくには最初の行を書き始める前に自分の書くことがすっかり見えていた。ぼくはただ季節の最初の陽差しから受けた感動を、最も動物的な、最も素直な、最もあたり前な形で、生きたいという欲望を生きようとする決意として書きつけたまでなのだ。生きようとする決意を何故死者に呼びかける形で書いたのか、それはぼくにも解らない。結果的にはその形が効果的であったのはたしかなのだが、その時には決して効果を計算した訳はなかつた。おそらくこんなところに、詩作の決して誰も解き明かすことの出来ぬ秘密があるのだろう。これはむしろ芸術の問題というよりも、生自身秘めている不思議な仕組みによるものなのではないのだろうか。

(「詩人とコスモス」)

この文章は谷川が十九歳の時に書いたものだが、弱冠十九歳にして生きることに對して肯定的な考え方が明確に認識されている。「生きる」こととは、言い換えれば「生きられる」ということにもなるといふこと、それと同時に、この詩を読んでいる私たち読者にも未来に向かう意欲と期待を持たせ、何事に対してもし生懸命取り組み、希望を捨ててはいけなと言っているのではないのだろうか。

## 第二節 作品「生きる」

「生きる」は昭和四十六年(一九七一年)九月に山梨シルクセンター出版部より刊行された『うつむく青年』に収載された作品である。この作品は小学校の国語の教科書にも載っている。第一節の「ネロ」同様リズム感があり、やわらかい感じのする作品である。以下、「ネロ」の詩について詳しく検討してゆく。

第一連では、日常生活におけるのがかかわく、木もれ陽がまぶしい、或るメロディを思い出す、くしゃみをするといった何気ない動作から生きているということの実感再認識することができる。また人と手をつなぐことによって自分はこの世でたった一人きりではなく誰かと一緒に生きているんだ、誰かと手を取り合って生きていることができるかと勇気づけられる。

第二連では、ミニスカート、プラネタリウム、ヨハン・シュトラウス、ピカソ、アルプスといったある事柄について美しいと感じること、美しいものに出会うことができるということへの実感であること述べている。そして生きているからこそこの世の中に存在する隠された悪を注意深くこぼむことができる、とも述べている。

第三連では、泣く、笑う、怒るという喜怒哀楽が表わせるのは生きている証拠で、何よりも生きていく上で自由があるからだ述べている。

第四連では、いま現在、犬が吠え、地球が廻りどこかでひとつの命が誕生し、どこかで人が傷つき、またどこかでぶらんこがゆれ、その間も地球は動くことをやめず、いまという時はもう二度と来ない、だからいま生きていることは素晴らしいと述べている。

第五連では、生きているということは、人間だけでなく、鳥、海、かたつむりといったこの世の中に命あるものすべてが生きているのだ。その中でも人間は、人を愛することができ、そして手をつなぐことにより、自分の命だけではなく相手の命のぬくもりをも知ることができる。生きているということはこの世に自分の命があるということである。

この詩は五連とも八生きているということ／いま生きているということ√という文章で始まる。生きているということは素晴らしいことであるということが、強調して述べられている。この詩で述べたことは本当に当たり前のことである。しかし、私は、この詩を初めて読んだとき、妙に感動したので今でもはっきりと覚えていゝる。生きていることは当たり前のことであると思い、生きているということに対して無頓着であった小学校六年生だった私は、この詩を読んだときに正直にいつて初めて命の大切さ、生きていることの素晴らしさを知った。日常の生活のなかで、忙しさのあまり忘れてしまいがちな生きているということの素晴らしさを谷川俊太郎は私に教えてくれた。

谷川俊太郎がこの「生きる」の詩が入った『うつむく青年』という詩集を出したのは昭和四六年（一九七一年）九月のことである。

私はこの年の九月に生まれたので、この「生きる」という詩とは同年である。この詩が書かれてすでに二十年がたつのに、この詩が新鮮に見えるのは何故なのだろうか。谷川自身平成元年（一九八九年）に改めて出版された『うつむく青年』のあとがきのなかで次のように述べている。

考えてみると、一九七一年の初版当時生まれた赤ちゃんが今ではもう立派な「青年」です。学園紛争と万国博とアポロ一号の時代の青年と違って、今の青年はうつむいていないように見えますが、これらの詩がそういう彼らの気持ちにもとどくことを願っています。

谷川が詩を通して言いたいことは、二十年前と何ら変わっていない。だから新鮮に感じる事ができるのだ。そして「生きる」ということは私達人間が生きていく上で不可欠な事実である。この「生きる」という詩は、これから先、何年たっても読む人々に感動を与え、生きていることの素晴らしさ、命の大切さを教えることだろう。

### 第三節 作品「犬と主人」

「生きる」では今自分が生きていることにたいしての生を、「ネロ」では死の方から生を見ようとしている。ここで、「ネロ」と同様に死の方向から生を見ている作品をもうひとつあげてみることにする。

犬と主人

電柱の根元で片足をあげ

犬が小便をする

皮ひものはじっこで

主人はじっと待っている

本屋の店先で足を止め

主人が立読みする

皮ひものはじっこで

犬はじっと待っている

皮ひもに結ばれた二つの魂は

ともに不死ではない

犬は風を嗅いでいる

主人は何を嗅いでいるのか

第一連、第二連において犬と主人とは皮ひもという絆で結ばれている。と同時に犬が小便をすること、主人が立読みをするという動作から生を感じとることが出来る。しかし第三連に於いて犬と主人の關係は相対化されている。皮ひもに結ばれた二つの魂、つまり、犬と主人の魂は不死ではないといえながら、犬は風を嗅いで生を受けとめているが主人は何を嗅いで生を受けとめているのだろうか。死んではない魂が受けとめているもの、犬は風、主人は……、というところから生とは何かということや谷川俊太郎は死の方から見ようとしているのではないのだろうか。この詩からも彼の生きることに対する心情が伝わってくるような気がする。

谷川という詩人は死を人間が生きることのみからではなく、人間

を含めた動物、さらには、世界つまりコスモスからも感じとっていることがうかがえる。この三編の詩から私は生きることの尊さについて、生とは死があつて成り立っているということや学んだような気がする。ここで言うコスモスについて、次の第三章で述べていきたいと思う。

### 第三章 谷川俊太郎のコスモロジー

谷川俊太郎は『二十億光年の孤独』を書いた当時のことを次のように述べている。

『二十億光年の孤独』を書いたのは手元にあるノートブックを見ると一九五〇年五月一日である。二十億光年の孤独は当時の私の知識の範囲内での、宇宙の直径を意味している。特に天文学に興味を持っていたわけではないが、ひとりっ子で恵まれた環境に育った十九歳の私は、まだ人間関係の中での孤独を知らず、むしろ無限と叫びたい宇宙の中に投げ出された一有機体としての自分を、さみしきとか、ひとりぼっちとかの感情をあまり伴わずに、孤独と規定していたようだ。△宇宙はひずんでる▽とか△宇宙はどンドン膨らんでゆく▽とかの知識も、初歩的な天文学の本の中から得たもので、通常感覚ではとらえようのないそうした抽象的宇宙像が、孤独や不安などの人間の精神状態に具体的に直結しているのは、比喩でもてらいでもない、当時の私の実感だった。つまり私には社会のなかの人間というものがほとんど念頭になかった。そのくせ一方で私は当時の日本、ひいては世界の動きに、大きな影響を受けていたと思う。孤独も、不安も、もとめ合うこ

とも、いま思うと宇宙的な感覚であると同時に、社会的な感情でもあった。

〔二十億光年の孤独〕 中学現国指導書

彼のコスモロジーは、『二十億光年の孤独』に原点を置いていることがわかる。更に、

青年は非人間的であることによって人間になる。青年はコスモスに支配される。彼を支配するものは決して人間ではない。彼が学生運動に身を投じようと、一片の遺書を残して心中しようと、彼を動かしているものが若さのもたらす情念であることは違いがない。その情念は人間を通してではなく、直接にむしろ肉体的にコスモスとむすびついている。

〔愛のパンセ〕

と述べている。

谷川に言わせれば青年が生きているということはコスモスの中に生きていること、コスモスと戦うこと、そして青年を動かすものは大人ではなく、コスモスであるということになるのだろう。

コスモスとは、広辞苑によれば、ハ秩序。転じてそれ自身のうちに秩序と調和とをもつ宇宙または世界の意、Vとある。人間、あえてここで限定するとすれば、青年が生きているためにはコスモスが必要である。谷川は詩人としてデビューした当初から、このことを述べるために様々な作品を書いてきた。その中の代表的な作品が「ネロ」、「生きる」なのではないだろうか。しかし、この他にも詩人谷川俊太郎のコスモロジーを上手く表わしている作品はたくさんあるのだろう。だが、私は谷川の内容から今迄述べてきたようなことを学んだ。コスモスということばはとても綺麗で、神秘的なことばであるような気がする。谷川俊太郎の述べるところのコスモロジーがこれから先、より深く理解できるように勉強していきたいと思う。

## おわりに

高校生の時から、国文科に進むのなら卒業論文は谷川俊太郎にしよう決めていた。今回の卒業論文でそれが実現できてとても嬉しい。しかし、谷川俊太郎という詩人は、活動範囲がとても広く、何を中心に研究すればいいのかかなり迷った。彼の作品の中でも最も私が勇気づけられた「ネロ」と、初めて出会った作品「生きる」、これらの詩によって「生とは何か」ということを深く考えさせられた。この二編に加えて、「犬と主人」という詩を検討してみた。この三編の詩に共通して言えることは「生きる」ということであつた。

日常生活に忙しくて、私達は生きることの素晴らしさ、命の重みを忘れてしまいがちである。しかし、この三編の詩を研究することにより、あらためて生きること、命の尊さについて実感することが出来た。そして、谷川俊太郎の詩を読んでいくうちに、生きることがは本当にむづかしいことなのではないのだろうかという気がしてきた。無気力に生活しては駄目だし、何か希望を持ち未来に向かつて前進していかなければ生きていくとは言えないような気がしてきた。彼の作品を改めて読んで、生きるということの奥底にある何かに少しではあるが触れたような気がする。

これからの私の人生において、辛い時や苦しい時にこの三編の詩を思い出すと思う。それほど私にとってはとても印象に残った詩である。詩人を研究するということは思っていたよりもはるかにむづかしく大変だった。しかし、これからも彼の作品を読んで、もっと谷川俊太郎という人について研究していきたい。

(みつせ ともこ)

参考文献

- 『谷川俊太郎のコスモロジー』 思潮社 昭和六十三年  
『日本現代詩』 山内祥史編 双文社出版 昭和六十一年  
『うつむく青年』 谷川俊太郎 サンリオ出版 平成元年  
『現代詩の構図』 小海永二 文弘社 昭和五十二年  
『三角宇宙』 谷川俊太郎 吉本ばなな 高田 宏  
青龍社 平成二年

△評▽

小学生の時に出会った詩、「生きる」を心のうちで、何度も何度も繰り返し温めつづけて来た姿勢、本当に立派なことだと思ふ。三編の詩ではあるが、谷川の詩と正面から取り組み、日常茶飯の中に見られる「生と死」の主題を正確に読み取っている。が、一方で、「生と死」に焦点を絞ったために、見えなくなっている問題もないわけではない。宇宙と人間、絶対孤独、言葉の持つリズム、遊び……等の問題である。しかし、これらも究極は「生と死」の問題に還元されるといったらよい。その意味で、谷川の詩の本質を「生と死」とみるのは正しい。今後の大いなる発展を望む。

(宇野憲治)